



明治時代の旅行記・『日本奥地紀行』を読んで・

ルート推測の試み

渡辺 真一

最近読んだ中で、『日本奥地紀行』イザベラ・バード著・高梨健吉訳・平凡社ライブラリーという本があります。今回、この本の中に記されている地名がとても興味深く、どのようなルートであったかを自分なりに推測してみたものを、内容と共に紹介させていただきたいと思います。本書には著者が現地を訪れた時、外国人を見たことのない明治初期の農村の人々の驚愕、著者が見た街道沿いの農村地帯の飾らない貧困生活、蚤虱蚊などの害虫があふれる家屋、皮膚がただれている子どもたちを放置せざるを得ない貧しい医療実態・・・これがわずか 130 年ほど前の日本の実態か！と驚くほどの状況・・・が実に生き生きと描かれていますので、機会がありましたらこの本をぜひ一読されることをお勧めします。

イザベラ・バードは 1831 年生まれのイギリス人女性で、彼女が 47 歳の時、すなわち 1878 年（明治 11 年）の 6 月から 9 月にかけて、通訳の日本人男性 1 名のみを同行して東京を起点に日光から新潟へ抜け、山形、青森から北海道に至る北日本を旅しました。さらに 10 月からは神戸、京都、伊勢、大阪を訪ねています。彼女は幼少時に病弱で、二十歳の頃に北米まで転地療養したことがきっかけとなり、アメリカやカナダを初め世界中を旅するようになったと言われています。この日本での体験を 1880 年 "Unbeaten Tracks in Japan" 2 巻にまとめましたが、その後、1885 年に関西旅行の記述その他を省略した普及版が出版されました。『日本奥地紀行』はこの普及版の訳本と言うことになります。本書は明治初期の日本の農村の実態、北海道のアイヌの生活を知る貴重な文献となっています。彼女は世界各地の紀行書を著した功績が認められて、1891 年に RSGS (スコットランド地理学会) 特別会員、また、1893 年には RGS (英国地理学会) 特別会員に選ばれています。

本書には私が知らない地名がたくさん出てきますが、地図を詳しく眺めてみると主要国道から離れた小さな支流を結ぶ峠の前後にその地名が見つかることが多くありました。想像するに、大河沿いに橋やトンネルで町と町を結ぶルートが作られたのは、急なアップダウンが困難な鉄道建設（例えば、東北本線が青森まで開通したのは 1891 年 明治 24 年）の結果であり、その後鉄道に沿った町がさらに発展して、自然に主要国道なども大河沿いに作られていったのではないのでしょうか。それまでの徒歩かせいぜい牛馬を移動手

段に使った時代には、最短距離を結ぶ峠道が基本的な街道だったのではないかと思われます。

イザベラ・バードは、この東北・北海道旅行の前に 2 週間ほど日光に滞在しています。日光では、日光東照宮の笙の演奏者として楽職を務めていた金谷善一郎の自宅に滞在しました。彼女は折り畳み式の椅子と折り畳み式の寝台を携えて旅を始めましたが、東京から日光に辿りつくまででも粕壁（春日部のことか？）栃木などで蚤虱にあふれた劣悪な宿に悩まされていたので、東照宮のすぐそばで美しい日本庭園のある金谷邸はずいぶん印象深く、しかも居心地の良いところだったようでここに 2 週間も滞在しました。なお、金谷善一郎はその後、ヘボン式ローマ字で有名なヘボン博士などの援助で、この地に金谷ホテルを設立することになります。

本書の中から一例として、以下のようなコースを紹介します。本書に記載のあるルートと地名は、順に日光 日光街道 大谷川徒渉 小百（こひゃく） 小佐越（こさごい） 鬼怒川徒渉 藤原（五十里） 中三依（なかみよ） 横川 糸川 川島 田島 荒海川（阿賀川）徒渉 豊成 跡見 大内（大内宿） 市川 高田（会津高田） 坂下（会津坂下） 阿賀野川（只見川） 片門（かたかど） 野沢 野尻 車峠（宝沢） 鳥井（とりげ） 栄山 津川で、津川からは阿賀野川の川下りによる船旅にて新潟に至っています。新潟からは山越えて赤湯、上ノ山を経由して山形に至り、さらに尾花沢、新庄、湯沢、横手、黒石を経由し青森に至っています。このうち、日光・小佐越間、田島・市川間、黒川（新潟）・黒沢（山形）間の 3 地域について、地名を基にして以下のようにコースを推定してみました。

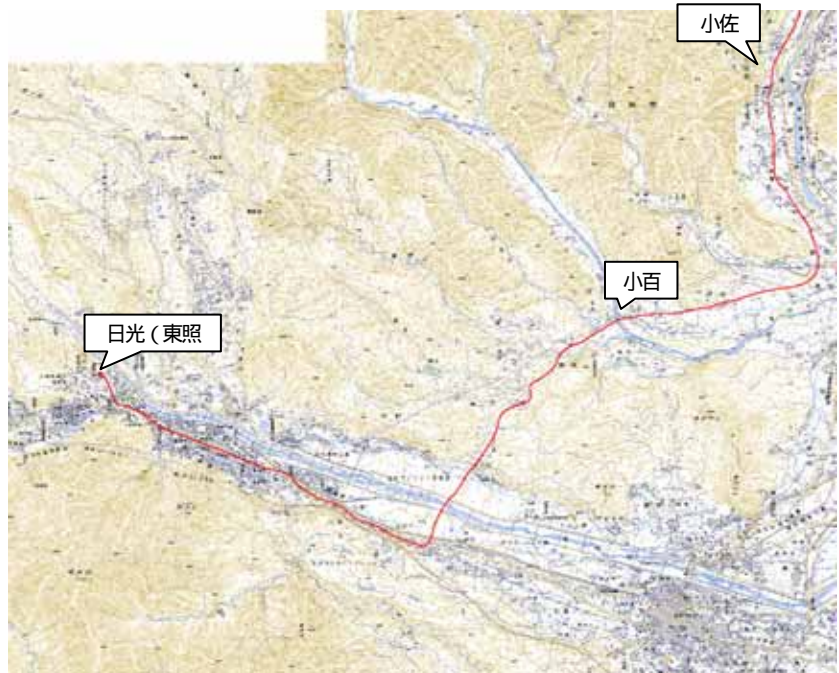


図1 日光 日光街道 大谷川徒渉 小百 小佐越

日光から田島に至るには、現在ならば日光から日光街道を今市市に至り、国道 121 号線で五十里湖・山王峠を経由します。基本的には明治時代もほぼ同じルートですが、当時は今市の手前で山に入り、小百と言うところを経由して、鬼怒川の流れる小佐越に出て現在ルートに合流します。しかし、もちろん当時には、五十里湖は存在していませんから、徒渉を繰り返しながら溪流を遡って行ったに違いありません。山王峠から先も現在は立派な道路が通っており、田島まで容易に到達できますが、彼らは馬を替えながら相当な苦勞をして田島に辿りついたようです。



図 2 会津田島 荒海川(阿賀川)徒渉 豊成跡見 大内(大内宿) 市川 (会津高田)

大内宿は今でもかなり当時の面影を残していると思われ、現在観光地として人気のスポットになっています。大内宿に至るには国道 121 号線が国道 118 号線と合流する湯野上温泉から入るのが一般的と思われませんが、どうしてここが宿場なのか理解できなかったのが、このルートを知ってようやく納得がきました。すなわち、会津田島から下郷や湯野上温泉を経由して阿賀川(または大川 阿賀野川上流)沿いに会津若松に至る国道 121 号線ルートではなく、当時は豊成と言うところから支流に入り、峠を越えて大内宿に至っています。当然ながら、このルートも相当の難路であったようです。なお、本書によると大内宿のある大内村は大名の宿所があり、「村は山に囲まれた美しい谷間の中にあつた」と記しています。

この小国を経由して赤湯に至るルートも現在では国道 113 号線として最初は荒川沿いに、分水界の宇津トンネルを越えると最上川の上流である白川沿いに進むのですが、当時は深い溪谷を避け、小さな峠を越えては次の町に至っています。

これらのような昔の街道が現在、どの程度残っているかわかりませんが、林道や生活道としてどこかに一部は残っている可能性はあると思われます。本書を片手にこのような古道を探しながら歩いてみるのも面白いかもしれません。



図 3 (新潟) (築地) 黒川 川口 沼 小国 玉川 黒沢 (赤湯)

おしらせ

AGCレポート 今後の予定について

2007年6月に実験的に発行開始した会報「AGCレポート」はいつの間にか4年を迎えようとしており今号で45号になります。サンプル版のVOL-0号を振り返ってみると、AGCの活動の記録を主体に、例会に出席できなかった方にも会の動向を知ってもらい、意見交換の場としての会報にする があります。

編集を担当して、どういう性格なものにするか暗中模索のまま、結果的には「会の山行記録」「個人の山行報告」「各地の山の案内」「個人の研究成果」「随筆的なもの」「例会の記録(議事録)」「次回の開催連絡」等々良くも悪くもたいへんバラエティなものになってしまいました。しかし例会の一週間前に手元に届くことを原則に毎月欠かさずに発行してきたつもりです。今回発行が大幅に遅れたことは(待ち望んでいた方がいれば)たいへん申し訳なく思っております。

しかし今後もこのような状況が続くと思いますので今後「AGCレポート」は不定期刊行にさせていただきます、例会報告や次回開催日の連絡は「会員連絡版」として別途とさせていただきます。

すでにメールにて議事録、次回開催日についてはお知らせしていますが、内容も会員内のざっくばらんな内容のやりとりのみとし、各自の意見や気のついたことはこちらにお願いします。また「AGCレポート」はやや対外的な内容の充実を図りたいと思います。この方針についてご意見や提案を遠慮なくお知らせください(近藤)

<後記>

記念号の原稿としてお預かりしたものは、次回より「特集」として順次掲載いたします。またそれ以外の原稿もどしどしお寄せください

AGCレポート vol-45 2011年4月1日発行
 発行：日本山岳会・山岳地理クラブ(代表・北野忠彦)
 〒102-0081 東京都千代田区四番町5-4 日本山岳会 気付
 TEL 03-3261-4433 FAX 03-3261-4441
 編集担当：近藤 E-mail：hikarikon@nifty.com